第3節　貨幣

貨幣の機能のうち、価値尺度と流通段は前述。3番目が蓄蔵貨幣である。

a　蓄蔵貨幣の形成

p.227　貨幣は蓄蔵貨幣に石化し

「蓄蔵」：貯めるという意味。商品を売った人は、そのお金を使わない。

p.229　貨幣は貨幣でまた、徹底的な水平派として、あらゆる区別を消し去る。

「消し去る」：もともとどういうところから出てきたお金か、わからなくなってしまう。

p.232　その商品の所有者がもつ社会的富をはかる。

お金をもっていることが豊かさを表わすとなってくる。

p.233　勤勉、節約、およびが

お金持ちほどケチになる。貨幣は貯めるだけでなく、金銀の製品として持っている。

ｂ　支払手段

貨幣の機能の4番目である。

p.236　彼は、支払いをする前に買っているのである。

（クレジットの危険性）

この場合の支払い手段とは「ツケ」で買う、つまりあとで払うといっている。

信用」で買う、クレジットである。

これは、払えなくなることもあるので恐慌の一つの原因となります。（『資本論』2巻）

p.237　商品流通の部面にもどろう。…支払期限に達してはじめて支払手段は現実に流通にはいる。

さしあたり、商品だけが動く。あとで支払って「流通にはいる」。手形が交換されれば、それで流通過程が動くということ。

（支払手段の節約）

手形は通貨とは違うが、流通手段を節約する一つの方法として、流通する。

待てない人は銀行で割引いてもらうともらうとよい。

手形の決済は、A→B　B→C　C→Aの場合、お互いに清算する。

p.239　諸販売の同時性と並立制は、通流速度が鋳貨総量の代わりをすることに制限を。える。それらは、逆に，支払手段の節約の一つの新しい梃子となる。

（貨幣恐慌）

p.240　支払手段としての貨幣の機能は、一つの媒介なしの〔直接的な〕矛盾を含んでいる。

…この矛盾は、生産恐慌、商業恐慌のなかの貨幣恐慌と呼ばれる瞬間に爆発する。

最近では「金融恐慌」ともいう。

恐慌になると急に「お金がなくなった」「貨幣だ、貨幣だ」の声が世界中にあふれてくる。次に、実際の取引が記されている。

（地代、租税など）

p.244　貨幣は契約の一般的商品となる。地代、租税などは、現物納付から貨幣支払に転化する。

商品の売買ではなく、家賃、地代、あるいは年貢の支払いに貨幣が使われることも一つの形である。

（日本の農業）ヨーロッパによって押し付けられた対外貿易が、日本において現物地代の貨幣地代への転化をもたらすならば、日本の模範的な農業もおしまいである。その狭い経済的存在諸条件は解消されるであろう。

自給自足的な農業経営は崩れ、資本主義的な農業、商業的な農業となるという予言（浜林）

c　世界貨幣

p.247　貨幣は、国内の流通部面から外へ歩み出るとともに

…貴金属のもともとの地金形態に逆戻りする。

p.248　国内の流通部面では、ただ一つの商品だけが、価値尺度として、したがってまた貨幣として役立つことができる。

国内では、鋳貨、補助貨幣、紙幣が使われているが、外へ出ると、局地的諸形態を脱ぎ捨てる‥

p.248　世界市場では、二重の価値尺度、金と銀とが、支配する。

国際的な支払いは、やはり金や銀でなければならない。

p.252　金銀の流れの運動は、一つの二重運動である。

（了）